
ある少女の独白

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少女の独白

【Nコード】

N7894J

【作者名】

紅月

【あらすじ】

私のようなスラムで育った貧民が愛を知ったのは、珍しいことでしょうか。人を変えるものは、いつだって些細なもの。復讐？そんな綺麗なものじゃあ、ないんですよ。これで終わりにしましょう、ではさようなら。

そう、それはよくある話なのです。

スラムのメス猿、というだけでございます。被害に遭うものは必ずしもそうではありませんが、少なくとも『彼女』は潔白の身でした。何かを”しくった”わけでも、誰かを殺したわけでも、盗みを働いたわけでもありません。それどころか彼女はスラムの小さな教会の修道女であり、いつでも、誰にでも優しく、微笑んでいる女性でした。私は彼女の笑みが好きでした、あんなに優しい笑顔を見たのは初めてだったからです。そんな彼女が暴漢に襲われたのは、そう、丁度一年半ほど前になるでしょうか。

そのとき私は常に彼女の後ろを、まるで家鴨の親子のようについてまわっておりまして。彼女といると、そう、幸せがぼろぼろと私のところまで転げてくるような気がしたのです。夕方ぐらいだったでしょうか、私はスラムを徘徊するのが日課でした。ふらふらといつも通りに糞溜めのようなくそ野郎とくそ女の巣窟を歩いていました。きです。

甲高い女の悲鳴でした。悲鳴などスラムではよく聞くものですが、その声に聞き覚えがあった私は、すぐそこに駆けつけました。そう、ご想像の通り、彼女はもう息絶えておりました。よっぱど抵抗したのでしょうか、真っ白な顔は赤黒く腫れて、女性らしい丸みとはとても言えない顔になっています。おそらく抵抗したのが気に入らなくて、すぐに殺してしまったといったところでしょうか。男数人のグループが、この死体をどうしようかと考えている最中でした。その男たちの人数？覚えておりません、私は彼らに興味がありません

でしたので。顔も、髪型も、何も覚えていないのです。ああ、下品で知性のかけらもない顔ということは覚えております。

その男たちは私を見つけると、獲物が増えたと喜びました。私は彼女に駆けよりました。ですが声をかけられませんでした、どう見ても彼女は死んでいましたので。そのとき私はどうしようもない喪失感に襲われました。悲しくて悲しくて仕方がなかったのです。

私もスラムで育った人間です。他の人間はどうでもいいし、暴力で全てを解決したこともありました。奪い、殺し、笑ったこともありました。殺すときは何を考えているのか、ですか、それは残酷な答えです。何も考えていないのです。殺す側にしたら、殺される側の人間は邪魔でどうでもいい人間だからです。

そう、それをあまんじて生きてきた私が、どうしていいか分からなくなったのはあのとかが初めてのことでした。人を愛していたのだと感じたのはそのときが初めてでした。しかしそれに気づいたところで、幸福だとは感じませんでした。彼女はもう死んでしまったのです。気づいたことがあまりにも重すぎて、泣くことができませんでした。それなのに笑うことはできました。それからどうしたか？ご想像の通りでございます。

あまりにもあまりにも悲しすぎて、よく覚えておりません。とても言うておきましょう。どうしても知りたいとおっしゃるなら、スラム街へ赴いてみてはいかがでしょう。このような場所で語るような内容ではありません。

彼女の墓は作りませんでした。私が覚えていたらいいのです。私は彼女を一生忘れることができないでしょう、ですが彼女にとらわれるということはありません。それは彼女が望まないことだからです。男は一人だけ生かしておきました。ああ、もちろん使い物にな

らないように両腕を、私のエモノが食ってしまいました。ですがしかし、いけませんね。大きな生ごみはすぐ腐ってしまいますから。

なぜ生かしたか？私を覚えていてもらうためですよ。あれらはどこで見たことがありました。そのとき調子に乗っていた奴らで、ボスの顔も地下マーケットで見たことがあります。運がいいと思いました。狩れるものがたくさんあるじゃないかと。いつか狩りに行く、その日まで私を忘れないように、残った独りに刻みつけた、刻んだつもりでしたか——。

どうやら失敗だったようです。そうですね、両腕を切り落としたら止血ができませんもの。出血多量で死んでしまったんでしょう。

だってあなたが、私を知らないということがいい証拠でしょう？

ええ、知ってますとも。復讐なんて綺麗なことじゃあないんですよ、ただね、私は終わるべきところを逃してしまったのです。キリがない、私を止められるものがない。殺すことで、泣くことで、彼女が還ってくるのならどんなにいいでしょう。そんなことはありえないのです。キリストが泥水をかきこむのと同じくらいありえないのです。

だからこれを最後にしたいと思います。この銃を握るのも、もう最後だと信じます。常闇の中で生きるのには、私は灯りを知りすぎってしまった。飽いてしまった。

大丈夫ですよ、私はね。もう就職先も決まっています。国籍も買いました。あなたは要領が悪かった。そういうことなんでしょう。スラムで当たり前のことをして、たまたま、トチ狂ったくそ女にひっかかってしまったのだから。雇われ口など、表には数多く存在するですよ、皮をかぶっていればいいだけなのですから。居心地が いいものです、知ってしまったからには、私はそれらが欲しくてたまらない。

あなたと私が、どうしてこんなにも違ってしまったのか。さあ、そんなことは分かりません。そしてどうでもいいことでしょう、私はあなたに興味がないのですから。あなたも私などに興味はないでしょう？同じことです。

今こうして銃を向け合っているのはね、ただ、そう、出会ったものが悪かったのでしょうか、お互いに。良くも悪くも、人を変えるものは些細なものです。

さて、そろそろ終わりにしましょう。

若旦那様がお目覚めになる前に、玄関の掃除を終わらせなくては。婦長殿にどやされてしまいますから。地獄へ、先に行っていてください。

では、さようなら。

（後書き）

初めての投稿です。HPにあるものの1つですが……とんでもない
病み系ですね。こういうものにはたして需要はあるのか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7894j/>

ある少女の独白

2010年10月15日19時22分発行